

書評

ダナ・ボイド（野中モモ訳）（2014 = 2014）『つながりっぱなしの日常を生きる——ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』
草思社

平井 智尚*

『つながりっぱなしの日常を生きる——ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』という書名は目を引き、手に取りやすい。原著のタイトルは『It's Complicated: The Social Lives of Networked Teens』であり、訳者が「あとがき」で述べているように、「直訳すれば「それは複雑—ネットでつながった10代の社会生活」だろう」（Boyd, 2014=2014: 349）。あるいは、『複雑化する若者たちのネットワーク化された社会生活』と意識できるかもしれない。ただ、「……この本は、親やメディアや法曹関係者、企業家など若い人々の生活に及ぼす力を持つ大人たちに、ネット上のパブリックでティーンがやっていることは理に適っていると説得する試みである」（同書: 44）という著者の狙いに即すと、いかにも専門書然とした「意識」のようなタイトルはふさわしくないだろう。

書名を一見する限りでは取りつきやすい文献であるが、その内容は専門書として高い質を伴っている。著者であるダナ・ボイドは、米国社会における「ティーン（10代・若者）」のソーシャルメディア利用について、2003年から2013年にかけて収集した民族誌的な情報と、2007年から2010年に行われたインタビューの資料をもとに本書を執筆した。本書が特質すべきは、まさしくエスノグラフィーの手法を用いて、若者のソーシャルメディア利用へと接近した点にある。

若者による新たなテクノロジーの利用は、社会的な関心を集めることが多く、その向きは否定的なものが目に付く。それは、ダナ・ボイドが調査対象とした米国だけでなく、日本にも当てはまる。その例として、古くは1990年代のポケベル、2000年代の携帯電話・メール、そして、2010年代のSNS・ソーシャルメディアが挙げられる。そして、社会的に、特にセンセーショナルな観点から注目を集める事件や出来事が起きた際に、説明変数として若者のテクノロジー利用が強調される。例えば、2015年に神奈川県川崎市で発生した中学生殺害事件では「LINE」が、2017年に神奈川県座間市で発生した殺人・遺体遺棄事件では「Twitter」との関係が取り沙汰された。このような「結びつき」について著者は次のように論じている。

テクノロジーはしばしば世界が抱える大問題の解決策として歓迎される。これらの解決策がうまくいかなかったとき、人々は幻滅する。その反動から、人は同じテクノロジーが招くかもしれない酷いことのほうを気にかけるようになる。

若者のソーシャルメディア利用を取り巻く恐怖と不安の大部分は、誤解あるいは打ち消された希

*ひらい ともひさ 日本大学法学部新聞学科 専任講師

望に起因している。たいていの場合、人々の混乱は、ユートピアそしてディストピアの修辞をもって現れる。この論点も、この本を通じてたびたび浮上する。とりわけ性犯罪者などオンライン上の安全の問題の話になると、誤解がモラルパニックを生じさせてしまうこともしばしばだ。それ以外にも、ティーンがソーシャルメディア中毒に陥っているといったディストピア的な見解や、テクノロジーが社会の不平等を解消するといったユートピア的な考えを語る時、テクノロジーへの中止がそこで働いている他の力学をぼやけさせてしまう（同書：31）。

こうしたテクノロジー利用の把握の仕方は、筆者も指摘するとおり「技術決定論」と呼ばれるものであり、前述のような事件・出来事に言及する文脈ばかりでなく、「技術が社会を変える」といった、まさしく「ユートピア的な修辞」としても語られる。しかし、テクノロジーが利用されている場面は、それほど単純ではない。「つながりっぱなしの日常を生きることは、複雑なものなのだ」（同書：31-32）。このような問題意識のもと、筆者は若者たちの実際のソーシャルメディア利用の場面を調査対象とした。

調査結果から明らかになったことは、技術決定論によって語られるような「ディストピア」ではない（もちろん「ユートピア」でもない）。そこに見られるのは、繰り返し触れているように「複雑なもの」であり、筆者が「ネットワーク化されたパブリック」と呼ぶ、ソーシャルメディアを介して公的な生活に参加している若者たちの姿であった。

ネットワーク化されたパブリックは、空間的な意味と想像の共同体の意味、両方においてパブリックである。それはソーシャルメディアその他の新興の技術を通じて、その上に築かれる。空間として、ネットワーク化されたパブリックは存在する。なぜならソーシャルメディアは、人々が集い、つながり、たむろし、ふざけることを可能にするからだ。テクノロジーを介して形づくられるネット上のパブリックは、先行する世代のティーンにとってショッピングモールや公園のような公共空間が持っていたのと同じ機能を果たしている。社会構造として、ソーシャルメディアはネット上のパブリックを生み出し、それは人々が自分たちをより大きなコミュニティの一部として認識することを可能にする。かつてのティーンたちがテレビを消費することによって自分らがマスメディアを通してつながっていると感じる事ができたように、現代のティーンたちはソーシャルメディアによって集合的な想像の共同体の一部としての自らを思い描くことができるのだ（同訳書：21）。

「ネットワーク化されたパブリック」という言葉だけを抽出すると、「公共圏（Public Sphere）」といった言葉との関連性も想起され、やや規範的にも映る。だが、ネットワーク化されたパブリックとは、要するに、Twitter（ツイッター）、Instagram（インスタグラム）、TikTok（ティックトック）といったSNSを通じて短文、写真、動画などを公開し、友人・知人たちと交流する空間を指しており、それらは、日本社会を文脈とし、日本語が用いられるインターネット空間においても日常的に目にする光景である。このように「ネットワーク化されたパブリック」という観点から若者のソーシャルメディア利用を把握するならば、そこに見られるのは、物理的な場所性を伴う公共空間で活動する若者と変わらず、ことさら「ディストピア」というわけでもないだろう（もちろん「ユートピア」でもない）。本書でも取り上げられ、日本社会においても話題となるネット中毒、

ネットいじめ、ネットと性犯罪といった諸問題は、若者によるテクノロジー利用の問題ではなく、公共空間で生じている問題をわれわれは目にしているだけなのである。ダナ・ボイドはいじめの問題について次のように述べる。

ソーシャルメディアを介して新しいかたちのドラマの場ができたとはいうものの、ティーンのおふるまいは大幅には変わっていない。ソーシャルメディアはいじめの力学を劇的に変えたわけではなく、こうした力関係をより多くの人々の目に触れるようにした。私たちはこの可視性を、厳罰化を正当化するためにではなく、実際に気づいてほしがっている若者を助けるために利用しなければならない。テクノロジーを攻めたり、テクノロジーの利用が最小限になれば衝突はなくなると仮定するのはばかげている。大人の介入を効果的なものにするには、ティーンにとって何が大事なのか、また、なぜ彼らが特定の意地悪および残酷行為に携わるのかを理解することが重要だ (同書: 246-247)

若者を取り巻く諸問題 (とされるもの) の原因は、ソーシャルメディア利用によってもたらされたのではなく、ソーシャルメディアはその諸問題を可視化しているに過ぎない。社会学者の土井隆義は、出会い系サイトや SNS にはまり、場合によっては犯罪被害に巻き込まれる子どもたちについて、その背景には「人間関係以外の選択肢の可能性からの疎外」があると指摘する。「ネット依存」と呼ばれる現象も、人間関係の依存、すなわち「つながり依存」であるという (土井隆義、2014)。ダナ・ボイドも同様に、ティーン期のソーシャルメディア中毒は、「もし中毒だとしたら、それは友達同士お互いに中毒になっているのだ」 (Boyd, 2014 = 2014: 131) と指摘する。このようにとらえるならば、若者のソーシャルメディア利用は恐怖、忌避、排除すべきものではなく、むしろ、諸問題を可視化し、それらを理解するための道筋を与えてくれるものである。「テクノロジーは若者たちが直面している困難を可視化するが、それ単体では有害なことも起こしもしないし、防ぎもしない。両方のための道具になり得るとはいえ、それは単純に毎日の生活の様々な側面を、いいものも悪いものも、鏡のように映し出してかくだしているのである」 (同書: 348)。

しかし「ネットワーク化されたパブリック」は極めて複雑であり、そうした環境を理解するのは至難の業である。現在の日本社会の文脈で言えば、若者たちのソーシャルメディアを通じたやりとりの主流は「非公開」である。原則として承認されたユーザー以外はそのやりとりを見ることができない。若者たちはソーシャルメディアを通じて形成される「ネットワーク化されたパブリック」に「プライベートな空間」を作り上げているのである。さらには、複数のソーシャルメディアで、複数のアカウント (ID) を所持し、場面や関係性にに応じて使い分けている。このような複雑な現象に対応しようとする際、テクノロジーによって説明するのは確かに手っ取り早い。ある意味ではそれは仕方のないことかもしれない。そもそも当の若者たちですら「文脈の衝突」や「文脈の崩壊」を制御できず、いわゆる「晒し」や「炎上」と呼ばれるような思いも寄らない事態に直面する中、その中にいない人たちがすべてを把握するのは不可能に近い。ただ、その「限界」をテクノロジーによって解消するのではなく、なぜ若者たちは複雑なつながりっぱなしの日常を生きているのかを考えるべきではないか。「〇〇疲れ」が繰り返し指摘され、メッセージアプリ (LINE) の既読や返信のタイミングに気を遣い、もはや、メッセージアプリを離れ、SNS (インスタグラム) の

DM（ダイレクトメール）でプライベートなやりとりを展開している。このように人間関係の管理に労力を費やししながら、つながりを維持しようとするのはなぜだろうか。この「問い」に対する答えを本書が与えてくれるわけではない。だが、安易な、あるいは心地よい技術決定論を拠り所とする限り、「問い」へと至ることもできない。そうした問いを「若い人々の生活に及ぼす力を持つ大人たち」（同書：44）が持たねばならないのは言うまでもない。あわせて渦中の若者たちも自分たちの複雑な、つながりっぱなしの日常を問う必要がある。そのきっかけを本書は与えてくれる。

参考文献

土井隆義（2014）『つながりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える』岩波ブックレット